

# 在日ブラジル人青年の学び直し

## —通信教育受講生の生活史分析から—

児島 明\*

### Life Histories of Brazilian Young People in Japan Learning by Correspondence

KOJIMA Akira\*

キーワード：在日ブラジル人青年，通信教育，生活史

Key Words: Brazilian young people in Japan, learning by correspondence, life history

#### I. 課題の設定

「ニューカマーと教育」をめぐる研究はニューカマーの子どもたちが学校で直面する諸問題を解明する作業に熱心に取り組んできた。その結果、日本の学校への適応を中心に、対処すべき諸課題が明らかにされると同時に（太田 2000, 志水・清水編 2001, 小内編 2003, 児島 2006, 清水 2006, 金井 2012），学校内部の権力関係を組み替えていくような実践も報告されてきた（清水・児島編 2006）。また、ニューカマーの子どもたちの成長を反映して義務教育段階以降の進路形成にも目が向けられるようになり、高校進学や高校生活を射程に入れた研究もなされるようになった（山崎 2005, 広崎 2007, 志水編 2008, 趙 2010）。

他方、ニューカマーの子どもたちが通う教育機関として外国人学校の存在も見落とすわけにはいかない。最近刊行された志水ほか編（2014）では、「コリア系学校」「中華学校」「ブラジル人学校」「インターナショナルスクール」という4つの学校群から選定された17校のエスノグラフィーを中心に、「学校の経営戦略と家庭の教育戦略とがクロスする場所」（志水 2014, p.19）としての外国人学校の現状がいきいきと描きだされている。また、ブラジル人学校に焦点を絞ったものとして、就学者のキャリア選択をめぐる語りに注目することで「帰国するためのブラジル人学校」という一元的な見方を相対化し、「日本に住むためのブラジル人学校」あるいは「ブラジル人コミュニティで生きていくためのブラジル人学校」といった見方への転換をうながした拝野（2010）をあげることができる。いずれも、外国人学校の機能について当事者の視点からの理解を試みた貴重な成果といえるだろう。

このように、ニューカマーの子どもたちが学校をどのように生きているかについては、それが日本の学校であれ外国人学校であれ、義務教育段階以降の教育機関も含めて研究課題とされてきた。だが、ニューカマーの子どもたちの進路形成過程をより包括的に理解しようとする場合、先行研究のほとんどが当該教育機関への就学者を調査対象に選定している点に自ずと限界が生じている。というのも、学校内部の課題がさまざまに論じられるのと平行して、ニューカマーの子どもたちの不就学に関する問題が早くから指摘されてきたからである（宮島・太田編 2005, 佐久間 2006）。

全国的なデータは存在しないが、文部科学省が2009年度にニューカマーが集住する29市を対象に実施した「外国人の子ども就学等に関する調査」では、不就学が確認された者は調査対象者

\*鳥取大学地域学部地域教育学科

12,804人中84人(0.7%)と報告されている。しかし、転居・出国等の事情により就学状況が確認できなかった者が2,753人(21.5%)もいた事実は、数字に表れない不就学者が相当数存在していることを暗示している。他方、外国人の高校進学率についてもやはり全国的なデータは存在しないが、浜松NPOネットワークセンター(2005)が報告するところによれば、全国17都府県で公立高校の「外国人特別枠」が設定されているものの、50%未満と推定されている。これらの数字を一瞥しただけでも、少なからぬ子どもたちが義務教育段階で、あるいは義務教育修了後に学校を離脱していることは容易に予想できる。

ところが、学校を離脱して以降のニューカマーの子どもたちの実態については、高校を退学した中国系ニューカマー青年の文化的アイデンティティ形成に注目した趙(2010)や在日ブラジル人青年が学校から離脱し就労に水路づけられていく過程を論じた児島(2008)など少数の事例分析があるものの、いまだ十分には解明されているとはいえない。こうした現状を鑑みれば、学校を早期に離脱したニューカマーの子どもたちの離脱の背景や離脱後の生活のありようについて実態把握を重ねていくことは急務の課題であるといえる。

ただし、その際、従来の研究が見過ごしてきた重要な問題があることを指摘せざるをえない。端的にいえば、「学び直し」の可能性をめぐる視点の欠如ということである。学校からの離脱は不安定な労働世界への参入とほぼ同一視され、不平等な社会構造が再生産されることへの危惧が示されてきた。たしかに、十分な学歴をもたぬままに不安定な労働世界に足を踏み入れた者が、その世界から抜け出すのは容易なことではない。とはいえ、かれらがそのような境遇にただ打ちひしがれているだけの受動的な客体ではないこともまた事実である。

筆者は2011年11月から東海地域のブラジル人学校を中心にフィールドワークを継続しているが、その過程で浮かびあがってきたのは、働きながら学び、必要な学歴を取得することで、不利な状況の打破を試みる在日ブラジル人青年たちの存在、そして、そのような「学び直し」を支える教育環境(本稿との関連では、ブラジルの中高卒業資格取得のための通信教育)が在日ブラジル人の間に形成されつつある現実であった。

ニューカマー青少年に対する移行支援を構想する際に、不就学とキャリア形成をいかに架橋するかはきわめて重要な問題である以上、当事者による学び直しの実践とその効果についての理解は不可欠である。そこで本稿では、学齢期を過ぎて通信教育によるブラジルの中卒資格ないし高卒資格の取得をめざすIn日ブラジル人青年に注目し、離学の背景、離学後の生活状況、学び直しにいたる経緯、将来展望等に関する当事者の語りを通じて、学校を対象とした従来の研究では見過ごされてきた学びの実態およびその可能性と課題の解明を目的とする。

## II. 調査の概要

本稿で対象とするのは東海地域のブラジル人学校(以下、A校)が開設する通信教育コースを受講するブラジル人青年たちである。筆者は2013年4月からこの通信教育コースに関するフィールドワークを開始し現在も継続中である。単位認定のための試験がおこなわれる隔週土曜日のうちのいずれかにA校を訪問して、スタッフおよび受講生に対するインタビューを重ねてきた。

### 1. A校通信教育コース開設の経緯と現状

A校にブラジル政府の認可を受けた日本初となる中学校・高校レベルの通信教育が開設されたのは2009年のことである。学齢期を過ぎた人びとが働きながら学び、学歴を取得できる機会を提供す

ることがその目的であった。受講に必要な費用は入学金として 4,000 円，月々の受講料として 23,000 円である。

A校の通信教育には2つのコースがある。1つは基本教育 (Ensino Fundamental) コースで，小・中学校 5～9 年生の義務教育の内容を提供するものである。受講には 15 歳以上という年齢制限がある。もう1つは中等教育 (Ensino Médio) コースで，高等学校 3 年間の教育内容を提供する。このコースを受講するには 18 歳以上でなければならない<sup>(1)</sup>。

学習方法は受講生が各自選択した教科に関して教科書に基づいて自学自習をおこなうのが基本であるが，ポルトガル語と理数系に関する教科については，隔週土曜日の 10 時から 17 時に対面指導を受けることもできる。学習した内容についてはプログラムに則って試験がおこなわれ，50%以上の点数をとることができれば合格となる。

受講生数は，2014 年 3 月現在，42 名である。コースごとの内訳を見れば，基本教育コースが 14 名（男性 5 名，女性 9 名），中等教育コースが 28 名（男性 17 名，女性 11 名）となっている。受講に関する問い合わせの電話は増える傾向にあり，ほぼ毎日のようにかかってくるという。

## 2. 調査協力者の概要

本稿では，2013 年 5 月から 2014 年 5 月までにインタビューを実施した 14 名を対象に分析・考察をおこなう(表 1 参照)。年齢は 18～32 歳。14 名のうち男性 10 名，女性 4 名，ブラジル生まれ 12 名，日本生まれ 2 名となっている。A校通信教育コースを受講する前の最終学歴をみると，中学校未修了 3 名（ブラジルの中学校 2 名，日本の中学校 1 名），中卒 4 名（ブラジル人学校 2 名，日本の中学校 2 名），高校未修了 6 名（ブラジルの高校 3 名，ブラジル人学校 3 名），高卒 1 名（日本の高校〔専修学校高等課程〕）となっている。また，過半数は，通信教育受講にいたるまでにブラジルの学校，日本の学校，ブラジル人学校の間で 1 回もしくは複数回の移動を経験している。また，全員が離学後，通信教育を開始するまでの間に就労経験を有している。

表 1 調査協力者の概要

No.	名前	年齢	性別	最終学歴	通信教育受講までの移動歴および就学歴
①	ベルナルド	29	男	中学未修了	(伯) → 中学途中 → (日) 仕事
②	アンジェリカ	23	女	中学未修了	(伯) → (日) 幼-小6途中 → (伯) → 8年生途中 → (日) 仕事
③	タダシ	22	男	中学未修了	(伯) → (日) 小1-小5 → (伯) → (日) ブラジル人学校5年生 → 中2-中3途中 → 仕事
④	シェイラ	25	女	中卒	(伯) → 6年生 → (日) ブラジル人学校 → 中2(3ヶ月) → ブラジル人学校中卒 → 仕事
⑤	ユキオ	18	男	中卒	(伯) → 5年生 → (日) 小6(卒業) → ブラジル人学校中卒 → 仕事
⑥	カミラ	18	女	中卒	(伯) → 2年生 → (日) 小4-中卒 → 仕事
⑦	リカルド	32	男	中卒	(伯) → 中卒 → (日) 中2-中卒 → 仕事
⑧	ブルーノ	29	男	高校未修了	(伯) → 高1 → (日) 仕事
⑨	ナタリア	27	女	高校未修了	(伯) → 高2 → (日) 仕事
⑩	マウリシオ	25	男	高校未修了	(伯) → 高2 → (日) 仕事
⑪	カルロス	18	男	高校未修了	(日) → ブラジル人学校幼-高2 → 仕事
⑫	ジルベルト	20	男	高校未修了	(伯) → (日) 幼-小2 → (伯) 3年生-6年生途中 → (日) ブラジル人学校高2 → 仕事
⑬	セルジオ	22	男	高校未修了	(日) → (伯) → (日) 幼-小2途中 → ブラジル人学校 (2, 3年) → (伯) 小1-高1途中 → (日) ブラジル人学校高3途中 → 仕事
⑭	アンドレ	24	男	高卒	(伯) → 1年生 → (日) 専修学校〔高等課程〕卒 → 専修学校〔専門課程〕1年 → (伯) → (日) 仕事

\*名前はすべて仮名。年齢はインタビュー実施時点のものである。

\* (伯) はブラジル潜在，(日) は日本潜在を示し，(日)以下の学年表記はブラジル人学校と記していない場合，日本の公立学校のものである。

インタビューは、この14名の受講者に対してA校にて実施した。所要時間は1人あたり1時間～1時間半である。14名中2名についてポルトガル語通訳を依頼したほかは、基本的には日本語でおこなったが、必要に応じて部分的に英語を使用したケースもあった。インタビューの進め方としては、来日経緯・滞日歴、学校経験、職業歴、家族関係、交友関係、通信教育受講にいたる経緯、余暇の過ごし方、将来展望などについて基本的な質問項目を準備したうえで、実際のインタビューにおいては質問の順番等にはとくにこだわらず、各項目についてできるだけ自由に語ってもらう半構造化面接の方法をとった。聴き取った内容は了承を得たうえですべてICレコーダーに録音し、後に文字起こしした。英語を使用した箇所については適宜日本語に翻訳した。

### Ⅲ. 離学の理由

#### 1. 就労を選択

日本で暮らすブラジル人青年が学校を離脱する主要な理由の一つに早期の就労選択をあげることができる。今回の調査協力者のうち半数となる7名が就労選択による離学を経験していた。7名の最終学歴をみると、中学未修了2名、中卒1名、高校未修了4名となっている。7名中5名については就労目的での渡日にともなって離学が生じており、残りの2名については日本での学校経験（いずれもブラジル人学校）を経た後に就労を選択した結果、離学が生じていた。

就労選択の理由は家計補助と自らの願望の実現とに大別される。

#### 家計補助

7名のうち4名(②, ④, ⑧, ⑨)が家計補助を就労選択の理由としてあげていた。

ブルーノ(⑧)とナタリア(⑨)はブラジルで高校に通っていたが、いずれも親の仕事がうまくいかず生活が苦しくなったため日本へのデカセギを決めた。ブルーノの場合、両親が営んでいた菓子屋が経営難に陥ったため、高1まで通っていた私立高校を中退してすでに3人のきょうだいが働く日本へと向かった。

ブルーノ：ブラジルの経済が不景気で、お父さんとお母さんのお店はあまり売れていませんでした。それで私はお父さんとお母さんを手伝おうと考えました。

ナタリアの場合、父親は所有する畑で野菜づくりに従事し、母親は学校の調理員として働いていたがやはり生計を立てていくのは困難だったため、妹も含めた家族4人で日本へデカセギに向かうことになった。そのため、高2まで通っていた公立高校を中退している。

アンジェリカ(②)もデカセギのための渡日が離学のきっかけになっているのはブルーノ、ナタリアと同じであるが、より複雑な過程を経てそこにいたっている。アンジェリカは4歳のときにデカセギを決めた両親に帯同されるかたちで来日し、小6までを日本の小学校で過ごしている。小学校生活での一番の思い出は友人関係であり、「友だちが本当に好きだった」といえるほど、日本人の級友たちとも良好な関係を築けていた。ところが両親が思うように仕事を得られず帰国を決めたため、日本を離れざるを得なくなってしまう。小6の2学期を終え、卒業まであと少しのところだった。帰国後はブラジルの学校に2年半ほど通うが、その間に父親が多額の借金を背負ってしまい返済の必要が生じたため、一番最初にビザがおりたアンジェリカがまずは単身、日本へデカセギに向かうことになった。学校は8年生の途中、つまりまだ中学校が修了していない段階での渡日であっ

た。まずは借金を返済し、自分の人生はその後と考えると、10年は戻らないと覚悟を決めていた。

調査者：日本に行くことになったというのは、「行きなさい」と言われたの？

アンジェリカ：「行きなさい」じゃなくて、やっぱりもう、お金がなくてどうしようもなかったから、誰かがたすける。家族をたすけるんだったら行くし、自分のためにもなると思うし。お父さんが借りたお金を全部払い終わったら、自分の人生も、お金をためながら、自分の家を買うためにとか、車を買うためにとか、そう考えていた。ブラジルの学校の友だちにも、10年ぐらいで戻ると思うよ、と伝えた。

シェイラ (④) は日本で学校に通った末に就労にいたっている点で他の三者と異なっている。シェイラの母親がデカセギ目的で単身日本へ渡ったのはシェイラが4歳のときであった。渡日後に離婚したその母親と暮らすために姉と一緒に日本へ向かったのは13歳、ブラジルの中学校生活も1年を過ぎた頃であった。来日後の生活は長野県からはじまり、まずは勉強してほしいと願う母の意向により県内のブラジル人学校に通うことになった。その後、岐阜県に引っ越すことになり当初は日本の中学校に通っていたが、中2の3ヶ月ほどを過ごしたところで母親の転職により隣市に引っ越すことになり、転校せざるをえなかった。中学校ではバスケットボール部にも入り、短くはあったが「楽しかった」。他方、母親にとって日本の中学校は会合等で参加をもとめられることも多く、仕事で手一杯の身としては困難を感じていたため、引越先では娘を再びブラジル人学校に通わせることにした。だが、シェイラにとってブラジル人学校は授業料が高い割に十分に学べない場所であると感じられた。母親の収入も多くはなかったことから、中学を卒業したところで学校はやめ、家計補助のために仕事をはじめることになった。

調査者：そこのブラジル人学校には高校はなかったの？

シェイラ：あった。でも、お母さんの、女の人の給料はあんまり多くない。仕事、ちょっとたいへんね。時間がない。私考えたね。かわいそう。

調査者：お母さん、かわいそうって。

シェイラ：そう。だから手伝うためにアルバイトはじめた。

調査者：どんなアルバイトをしたんですか？

シェイラ：カメラの組み立て。

## 自らの願望の実現

就労選択による離学を経験した残りの3名 (①, ⑩, ⑪) がその理由としてあげたのは自らの願望の実現であった。

ベルナルド (①) はブラジルの中学校に通っていたが最終学年の途中でやめ、すでに三重県に暮らしていたきょうだいを頼って単身、日本へ渡った。日本は「トヨタ、スズキ、日産、どの工場でも、学歴を問われることなく働ける」国であり、ブラジルにおいては入手困難な家や自動車を購入できると思われたからである。

調査者：どうして日本に来ようと思ったんですか？

ベルナルド：日本に行けば仕事があってお金を稼げます。家と車を買うことができます。ブラジ

ルは給料がとても安い。そして、ブラジルは生活がとてもむずかしかったです。それで、日本に来たいと思いました。

ただし、当初は日本以外にアメリカやカナダでの就労も視野に入れていた。しかし、2011年9月11日にアメリカで生じた同時多発テロ事件による状況悪化を勘案して、最終的に日本を選択したのだった。

マウリシオ(⑩)はブラジルで公立高校に通っており、大学進学を希望していた。「勉強がないと仕事は全然できない」と考えていたからである。しかし、トラック運転手をしていた父親の稼ぎだけでは生活もむずかしく、大学に行くための学費の支払いを期待できる状況にはなかった。そのような折、両親が子ども(マウリシオおよびその妹と弟のユキオ(⑤))を帯同して日本へデカセギに向かうことになった。当時、マウリシオは高2を終えたところであったが、それは大学の学費を稼ぐための願ってもないチャンスと感じられた。そこで、高校の途中ではあったが、自らも日本での就労を選択したのである。

マウリシオ：ぼくは17歳ぐらいで高校生でしたが、あとで大学に入りたいと思っていました。でも、お金がない。それで、どうしようかと考えて、日本に来ました。日本で働けばお金を貯めて大学の支払いをし、もっとよい生活ができると思ったからです。

調査者：大学の支払いをするためにね。

マウリシオ：そうそう。ブラジルにいたら、絶対できない。

カルロス(⑪)は上記2名とちがって日本生まれである。デカセギで来日して滋賀県で暮らす両親のもとに生まれたカルロスは、帰国をのぞむ両親の意向により幼稚園の頃からブラジル人学校で学んできた。両親が来日した当初は5年間で帰国する予定でいたが滞在は長期化し、カルロスがブラジル人学校で過ごす時間も延びていった。ブラジル人学校での生活は「順調にいて、そんなに高いレベルじゃないけど、普通に必要な勉強はできた」。なにより教師が教育熱心で、友人にも恵まれた。

ようやく高2を終えた頃、2年後に母親と一緒に帰国できる見通しがついた。かねてより自動車が好きで自動車関係の仕事に就きたいと考えるカルロスには、帰国前にぜひ受講したいとのぞむコースがあった。大手自動車メーカー直営の自動車整備専門学校内に開設された在日ブラジル人対象の自動車整備技術修得コース(1年制、以下T校)である<sup>(2)</sup>。帰国前にこのコースを修了するためにはブラジル人学校にあと1年間通って高校卒業を待っていたのでは間に合わない。また、年間50万円以上かかる授業料および必要経費は自分で支払う予定であるため、そのための貯金も必要となる。これらのことを勘案し、ブラジル人学校をやめて工場で働くことを選んだのであった。

調査者：\*\*校(通っていたブラジル人学校の名前)での生活は結構順調にいていたし、あと1年間ぐらいだったのに、そこをやめてしまったのはどうして？

カルロス：あと2年でブラジルに帰りたいという気持ちがあるので。それに、今年はT校のコースをすごくやりたいんです。でも、そのコースは9月からなので、あと1年\*\*校に行ったら間に合わないんです。それで、仕事をして、お金も貯めないといけなかったか

ら。そのコースをやるためにね。

調査者：それで仕事をはじめたわけですか。今はどんな仕事をしているの？

カルロス：工場で車のシートベルトをつくってる。

## 2. 学校生活や学校環境

就労の選択が離学の直接的な理由ではないものとして、学校生活や学校環境のありようをあげることができる。調査協力者 14 名のうち 5 名が、なんらかのかたちで学校にかかわる要因に言及していた。

### 学力

学校にかかわる離学の要因として 5 名中 3 名 (⑤, ⑥, ⑦) があげていたのが学力に関するものであった。

カミラ (⑥) は 9 歳のときに両親に帯同されるかたちで来日した。ブラジルで学校に通っていたのは 2 年生までだったが、来日後に通うことになった日本の小学校では小 4 からの出発となった。そのまま中学校にも進学して卒業している。来日当初は「全然わからなかった」日本語も、小学校に入ってから「どンドンわかってきた」とはいえ、教科の学習についていくのはきわめて困難で、「小学校から中学校、テストはいつも 4 点ぐらいだった」という。教師からの学習支援も十分には得られなかった。

調査者：テストの勉強とかで先生がいろいろ手伝ってくれるようなことはなかったの？

カミラ：先生はいたけど、なんかちゃんと教えてくれなかった。あんまりわかんなかった。「もう 1 回教えてください」って言っても、なんか、教えてくれなかったし。だから、あたし、自分で、「ま、いいや」みたいな。なんか、あっちもちゃんと教えてくれなかったし。

そうした学業成績上のあきらめから、中学校を卒業するのは無理だと思い込み、高校進学の可能性も考えなくなってしまった。

調査者：高校のことはどういうふうにしてた？

カミラ：テストもできなかったし。やっぱりテストができないと、卒業はできないですよ。テストで 4 点とか 5 点とったから、絶対に卒業できないって思って、もう、高校に行くことは全然考えなかった。

結果的に中学校の卒業証書を手にすることはできたのだが、高校進学希望が途絶えた今、就労以外の選択肢を思い描くことはできなかった (ブラジル人学校は授業料が高いうえに遠かったので選択肢に入らなかった。また、通信教育の存在はまだ知らなかった)。その結果、母親が働く電機工場と一緒に働くことになるのである。

リカルド (⑦) はブラジルで中学校を卒業した後、シングルマザーとしてリカルドが 5 歳の頃から日本で働く母親を「手伝いに」日本にやってきた (それまではブラジルで祖母とお婆の世話を受けていた)。ただし、来日後すぐに働きだしたわけではなく、日本の中学校に入っている。「日本語が

全然わからなかったから、1年戻して」2年生に編入した。1年目は「普通に行っていた」が、漢字のむずかしさに閉口し、2年目からは義父（母親が再婚した日本人男性）のすすめで日本語学校に通いはじめ（平日の9時から15時まで）、日本語能力試験のN3に合格することはできた。その一方で中3のほとんどを欠席することになり、当初は日本での高校進学も考えてはいたものの、あきらめざるをえなかった。その後は建設現場、クリーニング会社、製麺工場、溶接工場など10種以上の職場を渡り歩くことになる。

リカルド：ブラジルで中学校を卒業して、本当は日本で高校やろうと思ったんだけど、行けなかったんです。日本の字が全然ちがうんで。

上記2名は学力不振ないし日本語能力の不足により日本の高校への進学を断念したケースであるが、ブラジル人学校において高校進学を断念したケースもあった。たとえばユキオ(⑤)は、ブラジル人学校が提供する教育と自らが学校にもとめる教育の質とのミスマッチが原因で学校をやめている。ユキオはブラジルの公立学校で5年生まで通ったところで家族での渡日が決まった。来日後は日本の小学校に入り、小6の1年間はその学校で過ごした。最初は日本語がわからず、友人関係にも苦労したが、1年が経過する頃にはそれらの問題もある程度は解消され、「ハッピーだった」。自分としてはそのまま日本の中学校に進みたいと思っていたのだが、日本語のみ上達することを危惧した母親の意向により、ブラジル人学校に転校することになった。その学校には6年生から9年生まで通い、中卒資格を取得したのだが、そのまま高校に進学することには躊躇した。ブラジル人学校に通ってみて、1年間通った日本の学校との質のちがいに「びっくりした」からである。建物や机などのインフラから教師にいたるまで「全部、質が悪い」としか感じられず、ユキオにはブラジル人学校が通う価値のあるところとは思えなくなっていた。そこで、とりあえず高校進学はあきらめ、工場で働きはじめた。

## いじめ

学校内在的な離学要因としてつぎにあげられるのが「いじめ」である。調査協力者のうち2名(③、⑥)が学校生活で受けたいじめを離学との関連で語っていた。

先に学業不振による高校進学断念を語ったカミラ(⑥)は、小学校、中学校と続きたいじめの被害者でもあった。急に押される、教科書を破られる、「ひどい言葉」を書いた手紙を机に入れられるなどのいじめを小学校から中学校にかけて継続的に受けてきた。友だちもつくれず、学校から帰るのもほとんど1人だった。

調査者：学校生活、結構たいへんだったね。

カミラ：うん、たいへんですよ。

調査者：中学校はどうやって過ごしてたの？

カミラ：家に帰って、ずっと泣いたりとか。いっぱい、いじめありましたけどね。みんな、私のこときらいだったし。なぜかわかんないけど。

自然と学校も休みがちになり、中学時代には1ヶ月に10日程度の欠席も稀ではなかった。教師が様子を見にくることもあったが、欠席の理由を話してもまともには対処してもらえなかった。



調査者：そんなに長く休んでしまうときは、先生が来たりとかはあった？

カミラ：うん、ありましたね。「どうしたの？」みたいな。私は理由を言ったんだけど、それでも「ああ、しょうがない」みたいなこと言って。「今の子どもたちはそういうふうだから、がまんして」って言われた。

それでもカミラが中学校をやめることなく卒業証書を手にする事ができたのは、将来の就職において学歴が果たす役割を家族で何度も確認していたからである。

調査者：休みはいっぱいあったけど、でも、やめるってことはなかったんだ。

カミラ：うん。お母さんが「やめちゃダメだよ」みたいなこと言って、私も、やめたらダメって自分でわかってて、がまんしてた。

調査者：どうして、そこでやめたらダメって自分で思えたんだろう？

カミラ：大きくなったら、学校がなかったら仕事も、いい仕事がないから。だから、学校やらないと、未来にいいことがないみたいな。

調査者：そういうことも、中学校の頃から結構よく考えてた？

カミラ：そうですね。お母さんもお父さんも、結構そういうこといっぱい話してて。

中3になるとさらにいじめはひどくなり、両親も心配したが、「もうすぐ終わるから、もう大丈夫」と自分にも両親にも言い聞かせて卒業までがんばった。しかし、それが精一杯でもあった。いじめによる学校生活の不安定化は、精神的な疲労をもたらすと同時に学業不振につながり、高校進学を展望することを困難にってしまった。その結果、中卒後は就労のみが唯一思い描ける選択肢になってしまった。

カミラ：いじめがなかったら、たぶんずっと今まで高校に行っていたと思いますよ。

タダシ(③)の場合は、学校でのいじめに学校外の要因が重なることで離学が生じている。タダシは5歳のとき、先行して日本へデカセギに出ている父親を追うかたちで母親に帯同され来日した。来日後はしばらくは自宅で過ごした後、学齢期に達した段階で日本の小学校に入学した。最初は言葉も理解できず「ただ泣いて」いる状態だったが、絵を描くのが上手なことを認められたことをきっかけとして徐々に学校生活にも馴染んでいった。11歳のとき、父親に連れられて3ヶ月間ほど帰国した。この帰国は、ポルトガル語ができない自分の不甲斐なさを思い知らされる経験となった。街の看板をまったく読めないことやいとこたちとポルトガル語で話ができないのは「衝撃」であり、ポルトガル語習得の必要性を痛感した。そこで、再来日後はブラジル人学校に通うことを切望し、その思いを両親に伝えたところ承諾を得ることができた。そして通いはじめたブラジル人学校では、「幼稚園児ぐらいのレベル」と言われて「ABCD」からの開始となつたうえに、「まわりからすごい視線を感じて」馴染めず、困惑したが、「やっぱり勉強したくって」がんばった。

その学校に1年間通って5年生まで進んだ頃、月謝の支払いが困難になった両親から、「1回、中学校に戻った方がいいんじゃないの？」と言われた。「ちょっとがっかり」し、迷ったが、「迷惑をかけたくなかったので」ブラジル人学校はあきらめ、日本の中学校に通うことにした。中2からの編入であった。ただし、再来日後に市内で引越をして校区が変わっていたため、小学校時代の友だち

は皆無であった。中学校に入ってから、宿題やコンクールにだす作品に落書きされる・破られる、ペン・消しゴム・ノートなどを盗られる、遠くから「きもい」などの言葉をかけられるなど、さまざまないじめを受けたが、がまんして生活していた。

中3にあがって進路の話がもちあがる頃には、日本の高校への進学を考えるようになっていた。ところが、中3の3学期に両親が離婚してしまう。タダシは父親と暮らすことになったのだが、「大丈夫だよ」という父親の言葉とは裏腹に、生活状況が思わしくないのはあきらかであり、家計補助の必要性を感じはじめた。そのような現状を学校でのいじめと重ね合わせることで、タダシは卒業を目前にひかえながら就労を選択するにいたったのである。

調査者：中3の3学期でやめることになったわけですね。もうちょっとだったのになあ。

タダシ：そう。先生が「もうちょっとだったのに」って言ったんですけど、「ちょっと、いいですよ」って言って。いじめもあったので、それでもうやめたいなと思って、もう仕事しようかなとか思いました。そうやって決めました。両親のこともありつつ、いじめもありつつ、やっぱ、やめようかなと。

## 学校閉鎖

ブラジル人学校に通う生徒の場合、たとえばセルジオ(⑬)のように、学校自体の財政基盤の脆弱さにもなる存続の不安定性が離学の要因になるケースもある。

セルジオはデカセギで来日した両親のもと日本で生まれ、2歳の頃に帰国するが、5歳で再び両親に帯同されて日本にやってきた。来日後は日本の幼稚園に入った後、小学校に入学するが、小2の途中で再び家族での帰国が決まる。帰国後はブラジルの学校で1年生からやり直し、中学校を卒業、さらには公立高校に進学した。その一方で、地元の日本語学校やパソコン塾にも通っていた。日本語学校には日本関係の資料(観光地のパンフレットや歴史書など)が豊富にあり、それを見ているうちに日本への興味はますます強くなっていった。古書店で日本語の書物を探して読んだりもしていた。中学校を卒業する頃には直接日本を見たいという思いを抑えきれなくなり、「中学を終えて、それを区切りに日本へ来よう」と考え、「どうせならこっち(=日本)で高校をやっしまおう」と思って飛びだしてきた。高校に入ったばかりであった。日本では父親が先行して再渡日を果たしていたため、その父親を追って単身、日本へ向かったのである(その1年半後、母と妹も来日する)。

しかし、日本の公立高校に入りたいという当初の希望は、父親の転職にもなる引越で入学時期がずれたりしたために実現できず、ブラジル人学校に通うことになった。高1の1年間をこの学校で過ごす、経営難から他校と合併することになった。しかし、合併後の学校も高2の時点で経営破綻に陥り、ついに閉鎖となってしまう。仕方なくまた別のブラジル人学校に入り直すが、この学校も生徒不足のため高3の2学期で高校部門が閉鎖されてしまった。ついに行き場を失ってしまい、仕方なく工場で働きはじめた。

セルジオ：高校3年がもう終わる直前で学校がつぶれてくれました。きつかった。その後は、資金〔が必要〕なんてのもあって、働きにでちやいました。

### 3. 予期せぬ出来事

就労の選択や学校にかかわる要因のほか、当人の予期せぬ出来事に巻き込まれた結果として離学が生じるケースもある。先述したタダシの場合、中学卒業を目前にひかえた時点での両親の離婚が離学を促すことになっていた。

そのほかにも、たとえばジルベルト (12) の場合、両親の求職行動にともなう転居が離学をもたらした。両親はブラジルで精肉店を営んでいたが、新しくできた大型スーパーマーケットとの競合はきびしく、経営難に陥ってしまったため、ジルベルトが4歳のときに日本へのデカセギを決めた。来日後、は日本の幼稚園そして小学校へと進む。日本人の友だちに囲まれた小学生生活を送るなかで生活にも慣れ、ポルトガル語よりも日本語の方が話しやすくなっていった。そのため、8歳のときに両親が帰国を決めたときには「もう、本当に不安だった」。帰国後はブラジルの学校に3年生から編入して勉強を続けると同時に、ポルトガル語の発音矯正を施す機関に3ヶ月間通った。クラスの生徒数が50~60人と「めちゃくちゃ多いし、みんな、くちゃくちゃの感じ」の学校に最初はとまどったが、「少しずつ慣れて」いった。

ところが、両親が帰国後に再開した精肉店が再び経営難に陥ってしまう。そして、ジルベルトが14歳のときに家族での2度目の渡日が決まった。ジルベルトは再度の渡日を「めちゃくちゃ喜んだ」。小学校での給食を通じて好きになった日本の食べ物や「安心してどこでも行ける」治安のよさが「本当になつかしかった」からである。それゆえ、来日後も日本の中学校に通うことを望んだのだが、高校への接続を危惧する父親に強く反対された。そのため、「やる気がなかった」がブラジル人学校に通うことになった。そのブラジル人学校は、来日前にブラジルで通っていた学校と比べると「レベルが高かった」ため、勉強についていくのがむずかしかった。だが、幸いにもこの学校は午前みの半日制を採用していたため、教師との相談の結果、午後の時間を使って補習授業を受けることができた。そのようにして同校でそのまま高校にも進学して学びを継続した。

しかし、不景気で両親の仕事が激減し、職をもとめての移動を余儀なくされてしまう。通学するには距離のある他県への移動となってしまったため、高2であったがブラジル人学校はやめざるをえなかった。そして、この転居を機に、「家族を手伝うために働こうかなと思って」工場労働の世界に入っていくのである。

アンドレ (14) の場合、離学の原因は母親の病気治療のための帰国であった。アンドレは1年生までをブラジルで過ごした後、自らが営むビデオレンタル店の経営難からデカセギを決意した両親に帯同されて日本にやってきた。来日後の学校選択について、両親は「学費も高いし、レベル的にもちょっと低い」と言ってブラジル人学校をあまり評価せず、「どうせ日本にいるなら、日本の教育を受けなさいみたいな感じ」だったため、アンドレとしては「当たり前みたいな感じ」で日本の学校に通いはじめた。小2で入ってしばらくの間は日本語がわからず授業中も「ぼおっとしている感じ」だったが、日本語が上達した小4あたりからは「少しずつ馴染めていった」。中学校にあがってからはバレーボール部に入り、部活中心の生活を送った。勉強の方は、親のすすめで小5から塾（公文式）に通って国語と算数・数学を学んでいたこともあり、「他のブラジル人と比べれば上の方だった」が、それでも「日本人みたいに追いついてはいけなかった」ので「ちょっと、きつかった」。

高校進学に関しては、「正直あんまり勉強ができなかった」とことと美術が好きだったことから、担任にデザインの専修学校（高等課程）をすすめられ、推薦入試を受けて合格。その学校に入学し、高

卒資格取得のための普通科目の勉強とデザインの勉強を併行しておこないながら、3年間を過ごした。卒業後の進路については具体的に描けなかったのだが、アンドレが海外留学の希望をもっていることを知った教師から「ファッションの専門学校に行けば世界に行く道が短い」との助言を受け、ファッションの専修学校（専門課程）に進んだ。

ところが、通いはじめて1年が経過したところで母親が病気にかかってしまう。母親がブラジルでの治療を望んだため、家族での帰国が決まった。自らの関心に即したかたちでの学びを可能にする学校選択ではあったが、予期せぬ事情により断念せざるをえなくなってしまった。

#### IV. なぜ通信教育の受講を決めたのか？

##### 1. 工場労働への不満

通信教育による学び直しへと向かうきっかけとして14名中4名(①, ③, ④, ⑨)があげたのが工場労働への不満であった。そしてそれは同じことの繰り返しを強いられることからくる閉塞感や精神的苦痛として語られる点でほぼ共通していた。

中学修了を待たずに自ら望んで日本へ来たベルナルド(①)は、三重県の自動車部品工場で1年半働いたのを皮切りに、友人と連れだって何度も移動と転職を重ねた。「若かったので、いろいろな場所に行きたかったし、ちがうことをしたかった」からである。仕事を見つけるのもそうむずかしくはなかった。来日以降も帰国と来日を繰り返している。2001年に初来日して以降、2005年に帰国して11ヶ月滞在した後、2006年に再び三重県にやってきた。その2年後に再び帰国し、2年間滞在した後、2010年に再度来日して現在にいたる。3度目の来日の際には、派遣会社に旅費の立て替え分の支払いを済ませるまでの5ヶ月間は横浜で働き、その後、三重県に移動した。現在は自動車部品工場で働き、やはり中学修了前に来日して以降帰国せず、現在は2人の娘を抱えるシングルマザーとして働く姉と一緒に県内の団地に暮らしている。

ブラジルでの就労経験はなかったため、工場で働きはじめた頃は苦労したが、経験を積むにつれて必要な知識も増え、仕事に慣れていった。しかしその一方で、工場での単純作業を一生続けていきたいくはないという思いは次第に強まり、それから逃れるためには学びが必要であることを強く感じはじめた。

ベルナルド：なにかほかのことをするためには、勉強が必要です。残りの人生を工場のなかで同じことをして働きたいくはないですから。

ただし、「ほかのこと」を日本で追求することの限界も感じつつあった。というのも、これまでの労働経験を通じて、「日本語を話すのが上手で、読み書きのできる人にはたくさん仕事があって、給料もとてもよい」ことを実感する一方で、自らはそれに値する日本語能力をもちあわせていないと認識しているからである。そこで、より実現可能な将来としてベルナルドがめざしているのが、帰国してフライトアテンダント養成の学校に通い、その職に就くことである。そのためには高卒資格が必要だと考えていたところ、チラシや雑誌でA校通信教育コースの存在を知り、受講を決めたのである。

卒業を目前にひかえて日本の中学校をやめたタダシ(③)は、15歳から自動車工場で働きはじめた。そこで1年間働いた後、別の工場に移り梱包の仕事をするが、景気悪化のため1年働いてそれも

やめた。その後も、ファストフード店や電機工場でそれぞれ1年間働き、ブラジル人向けの語学学校で日本語教師のアルバイトを6ヶ月間経験した。そして現在、愛知県の部品工場で働きながら、県内の団地で一人暮らしをしている。現職は働きはじめて3年と、これまでで最も勤続年数が長く、現在は製造ラインの責任者を任されるにいたっている。

しかし、もともと絵や写真が好きで、その延長としてメイクに興味をもちはじめていたタダシにとって、工場労働は自らがのぞむ労働内容や職場環境からはかけ離れたものだった。

タダシ：工場という仕事は、雑っていったらおかしいですけど、やっぱりあれですよ、もうちょっと、きれいなところで仕事をしたりとか。メイクのイベントとかに参加したんですけど、〔自分には〕やっぱりそっちだろうなと思って。工場よりも、そのイベントとかでメイクした方がいいかなって。きれいな場所で、服も汚さずに仕事できるんだったら、いいんじゃないかなと思って。

そうした関心から、工場で働くかわらメイクの講座に参加したところ、それを職業にしたいという思いはさらに強まり、1年前からはメイクの専門校に通いはじめた。そして現在、日本で「メイク・アーティスト」になることを夢見ている。夢の実現に向けて関連分野の専修学校（専門課程）で学びたいとも考えており、そのためには高卒資格が必要なことから、インターネットでブラジルの通信教育について検索したところ、A校通信教育コースを見つけ、通える範囲でもあったため受講を決定した。仕事と勉強の両立は容易ではなく、ときには「頭がすごいパニックになって」しまったりもするが、夢がそれをささえる。また、「メイク・アーティストの世界では3ヶ国語しゃべれると役に立つと言われる」ことから、ポルトガル語と日本語（すでに日本語能力試験N1に合格している）に加えて英語を習得したいと考えており、高卒資格取得後はオーストラリアへの語学留学を希望している。語学留学を終え、帰国して専修学校（専門課程）に入学するというのが、「メイク・アーティスト」としての自立に向けた現段階での計画である。

シェイラ（④）はブラジル人学校で中学卒業後、家計補助のために岐阜県のカメラ工場で働きはじめた。はじめての経験でなにもわからず、労働時間も長かったので「すごいひどい」と感じたが、母親を「手伝う」ためにがまんした。18歳までその工場で働いた後、愛知県に移動し、自動車部品工場、ブラジル人が経営する学校・旅行会社・パソコン教室の事務、食品加工工場、セラミック工場など、初職も含め合計9つの職場を経験した。少しでも給料のよい職場をもとめて残業の多いところを選んだこともあるが、その分「ストレスもたくさん」背負い込まねばならなかった。長時間労働であるだけでなく、同じ作業の繰り返しが精神的に大きな負担をもたらした。それを自覚するシェイラにとって、勉強をはじめるとは、工場労働からくる閉塞感を打破するための有効な手段と考えられた。

シェイラ：私、会社（＝工場）の仕事はあまり好きじゃないね。だから、いっぱいストレス。全部、同じ同じ同じ。かわりたい。もっと新しいことをして、ストレスを少し直す。

そこで2013年10月に勤めていたセラミック工場をやめ、A校通信教育コースをはじめた。高卒資格を取得して大学進学を果たすことをめざしている。そして大学での学びを足がかりとしてより

望ましい職業への道が開けることを期待している。

調査者：大学が終わったらどうするの？

シェイラ：新しい仕事。大学に4年ぐらい行けば、もうほかの仕事もできるね。大学で勉強して、いい仕事のドアをあけます。

当面は日本で受講可能なブラジルの通信制大学<sup>(3)</sup>で経営学を学ぼうと考えているが、チャンスがあれば日本でもブラジルでもない別の国、たとえばイギリスの大学で好きな心理学を学び、ストレスで悩む「人を手伝える」カウンセラーになりたいという夢もある。

ナタリア(⑨)は高校を中退して日本に来てからは、岐阜県の弁当工場を皮切りに何度か職場を移しながら2年間働いた後、「日本での生活に疲れていたの」休息をとるために帰国した。ブラジルに4ヶ月滞在して再び日本へ来て以降は、愛知県で暮らしている。再来日後は最初にケーキ工場、つぎに自動車部品工場で働き、現在にいたる。

家計補助のための就労ではあったが、来日当初は「仕事ができ、お金ができるのでうれしかった」。しかし、働きはじめて何年か経過すると、「自分のやりたいことをやめるのはやはりよくないと思うように」なっていった。工場で単純作業を繰り返す日々のなかで、「子どもの頃から先生になりたいという夢をもっていた」ことを思い出し、その目標に近づくために行動を起こす必要性を感じはじめたのである。

ナタリア：仕事をしながら、ずっと同じ仕事をしているのはよくないと気づきました。なにかをめざして、目的をもたないといけないと。自分に対してちがうことをやりたいという気持ちがあって、そのためには高校を終わらせないといけないと思ったのです。

そのような折、たまたま立ち寄ったブラジル人の店でチラシを手にとった。そのチラシはA校の校長による教育講演の開催を知らせるものだった。興味を持ったナタリアは、その講演を聞きに行く。そこで紹介された通信教育の話は、高卒資格を取得できぬままに工場労働を続けるか、高卒資格を取得するために帰国予定を大幅に前倒しするのはさまで逡巡していたナタリアに大きな希望を与えるものだった。

調査者：通信教育があることを知ったときは、どういう気持ちでしたか？

ナタリア：すごくうれしかったです。自分のやりたかったことがわかりました。通信教育での勉強の仕方が自分には合っていてよいと思いました。仕事をしながら勉強もできます。自分のペースで勉強できるのがとてもよいです。そういうやり方こそ、まさに自分のできることでしたから。

通信教育を通じて高卒資格を取得した後は、日本にいながらブラジルの通信制大学で学びたいと考えている。いずれは帰国の予定であるが、大学で教員資格を取得し、日本のブラジル人学校で教職につくことも選択肢の一つとしてありえない話ではない。

## 2. 学びへの触発

通信教育受講にいたった理由として14名中4名(②, ⑥, ⑦, ⑧)があげていたのが、学びの意義や効用について語り、学びへと誘い、希望を与えてくれた他者との出会いであった。

たとえば親の借金返済のために中学卒業を待たずに離学そして渡日を選択したアンジェリカ(②)は、愛知県で暮らす兄夫婦のもとに身を寄せながら、すぐに仕事をはじめた。初職はプラスチック成形工場での検査・カットだった。経験を積むにしたがって、新人に仕事内容を教える場面も生じた。また、日本語が話せたことで、通訳を頼まれることもあった。その工場では3年間働いたが、「本当にいらいらしたり、忙しかったり疲れたり、結構ストレスがたまってきたから自分で退職した」。その後も自動車部品工場やパチンコ店など4つ程度の職場を渡り歩き、現在は自動車部品工場での検査の仕事をしている。その間、県内で2度の転居も経験している。

来日してからの経験でつらかったのは仕事ばかりではなかった。来日当初から一緒に暮らしていた兄夫婦が2年経過したところで帰国することになり、かわりに埼玉県に住んでいた姉夫婦が引越してくるようになった。ブラジル在住の両親が来日するまで、アンジェリカの面倒をみるためである。しかし姉夫婦の間ではけんかが絶えず、警察を呼んだこともあったほどである。眠れない日も続き「きびしかったし、つらかった」。結局、その様子を知って心配した両親が、予定を早めて日本へ来るようになった。

両親が来るまでの3年間は、働いて手にしたお金のほぼ全額をブラジルに送金し、借金返済にあてていた。両親の来日後も3年間は同様の生活が続き、ようやく借金を完済できたのは3年ほど前のことである。しかしその間、給料は減っていく傾向にあり、また、高齢で工場労働をしていた父親が心臓の病気に倒れ、その手術代を工面する必要が生じたりしたため、貯金も底をついてしまった。

だが、そのようにきびしい状況にあるアンジェリカに希望を与えてくれたのが、3年前に職場で知り合った「彼氏」だった。彼氏はブラジルで高校を卒業して来日し、5年間工場で働いた後にT校で学び、現在はT校から紹介された自動車会社で働いている。その彼氏に、知り合った当初から帰国後の就職には勉強が不可欠であることを説かれたことが、A校通信教育を受講する直接のきっかけとなった。

アンジェリカ：\*\*（職場の名前）のときに、なにか勉強しないといけないって彼氏が言ってて。

[今のままで]途中半端だから、ブラジルに帰ったときに仕事見つけるのたいへんだし、自分のためにもなるからって言って。そこから、[A校通信教育コースの]パンフレットがどこかの店であつたので電話して、しはじめたんですけど。

調査者：じゃあ、はじめたきっかけは、その彼氏の。

アンジェリカ：そうそう。彼氏が心配して言うてくれて。自分のためだよって。

彼氏との出会いにより、借金を完済して目標を失い、半ば自暴自棄に陥っていたアンジェリカは、再出発への希望を見出すことができたのである。

アンジェリカ：もう、夢なんかなかったみたいな人だった、私は。なにになりたいのかもわからなかった人だった。お金がなければなにもできないって思ってたし、本当にダウンしてた。もう、どうでもいいっていう感じだった。けど、なにか明るい道を見せてくれたのが彼だった。

調査者：じゃあ、彼氏との出会いがすごく大きな。

アンジェリカ：そう、そう。結構、私の人生変わった。〔彼氏は〕きびしい人だけど、ちょっとストレスたまるときもあるけど、私のために言ってくれるから、わかってあげられる人。

仕事と家事の合間を縫って、長らく遠ざかっていた勉強に取り組むのは容易なことではなく、支出がかさんだため月謝を払えなくなり数ヶ月休んだこともあるが、「もうはじめたんだから、終わりまでやる」と決意して続けている。継続をささえているのは彼氏の存在だけではない。A校に来て教師とふれあい、対面指導を受けてわからなかったことが理解できる喜びも、学習継続の大きなささえである。

調査者：ここで勉強していて、どうですか？

アンジェリカ：最初はね、「ああ、面倒くさいなあ」って思ったときもある。だけどね、この学校来てね、先生たちのたすけがあるから続けられる。結構、私、起きて「ああ、面倒くさいなあ」っていうときもあるけど、「まあ、行こう」。行って、着いて、先生が教えてくれて、「ああ、わかった！」っていうときに、「ああ、おもしろいね。来てよかった」っていうときがある。

日本の学校でのいじめと学業不振により高校進学への展望を描けなかったカミラ (⑥) は、中学卒業の時点で就労以外の選択を思い描くことはできず、「学校がないから、もうずっと仕事しよう」と漠然と考えていた。卒業後は母親が働く電機工場ではんだ付けの仕事をはじめ、すでに3年間働いている。工場では学校でのようないじめがない分、どちらかと言えば過ごしやすいつと感じている。

調査者：工場で仕事をやりはじめてみて、どうですか？

カミラ：うん、やっぱり仕事の方がいいなど。

調査者：どうして？

調査者：やっぱり、いじめとかもないし、なんか、みんなやさしいし。

ただし、いじめさえなければ「学校はきれいじゃない」というカミラにとって、就労は積極的に選択した進路ではなかった。それゆえ、「あんまり日本語もできない」ブラジル人の友人が日本の高校に通っている姿をみると、「ああ、〔高校に〕行ったほうがよかったな」と思うこともあった。

そうした折、やはり日本の中学校でいじめを経験し、卒業後に就労生活に入った4歳ちがいの兄がA校通信教育コースの情報を得て、「これをやった方がいいよ」とすすめてくれた。それをきっかけに受講を試みるが、これまで十分にポルトガル語を習得する機会がなかったために勉強は遅々として進まず、1年間は続けたのだが、「むずかしかったから、もう、あきらめた」。

しかしその半年後、カミラは再度の受講を決意する。きっかけは「彼氏」との出会いだった。2歳年上の彼氏もブラジル人で日本滞在が長い。ただし日本の高校を卒業しており、ブラジルの大学で学ぶことを希望している。その彼氏から、大学にはカミラと一緒に入りたいと言われたことに発奮し、高卒資格取得に再度挑戦することを決めたのである。



調査者：〔A校通信教育コースを〕もう1回やろうと思ったのは、なにか自分のなかできっかけがあったんですか？

カミラ：彼氏がもう高校が終わってて、やっぱり大学したいって思ってる。それで、私としたい〔と思っている〕から、〔高校を〕早く終わりたい。

高卒資格取得への再挑戦は彼氏との大学入学のみを目標としているのではない。前回の挫折と比較しながら「やっぱり、もっと大きくなったら、いい仕事を見つけたい。だから今、がんばってる」と述べるように、自らの将来に学びを主体的に位置づけるようになったのである。

リカルド(⑦)は日本語能力の不足により高校進学を断念し、中学校を卒業した後は大阪を中心に関西地方でいくつもの職場を渡り歩いてきた。建設現場、クリーニング会社、製麺工場、溶接工場、弁当・惣菜容器工場など、その数は9つにのぼる。大阪にいる間に日系3世である現在の妻と出会い、妊娠を機に帰国した。そして2年間滞在した後、1歳になった息子連れて家族で再び渡日。それ以降は愛知県を生活の場とし、一度の転居を経て現在は家族3人で団地に暮らしている。現在働いている自動車部品工場は勤続9年になり、正社員としてリーダーを任されている。だが、現在の日本語能力ではキャリアアップは容易ではないと感じており、「自分の国じゃないとむずかしい」ことを痛感している。また、学歴のうえでも「高校ぐらいないとよくない。まずいんです。どの仕事をやろうと思っても、なにもやれない」と思っており、高卒後に来日した妻からも、高卒資格を取得する必要性を説かれてきた。

そのような折、関西地方で生活していた頃に職場で知り合った男性に街で偶然出会い、同じ団地に住んでいることがわかった。その後、団地内のスーパーなどでたまに会って会話を重ねるうちに、その男性がともに暮らすパートナーの女性がA校通信教育コースのスタッフとして働いており、男性自身も高卒資格取得のために通信教育を受講する予定であると知った。それを聞いたリカルドは、「\*\* (男性の名前)さんとそういう話になったから、やらないといけなと思って」受講を決めたのである。

長らく勉強から遠ざかっていたため「はじめはあんまり頭のなかに入らない」が、「ちょっとずつ勉強すると入ってくる」という手応えを感じる。隔週2回の土曜日に試験を受けるために、平日は残業を終えて20時前に帰宅し、夕食とシャワーをすませた後に机に向かうという生活である。

高卒資格取得後はやはり日本にいながらブラジルの通信制大学で学びを続けようかとも考えているが、「お金の問題」次第でどうなるかは未定である。

家計補助のために高校を中退して渡日を選択したブルーノ(⑧)は、派遣会社に旅費を立て替えてもらうかたちで来日し、その返済が終了するまでは埼玉県某の弁当工場で働いた。弁当工場は毎日11時間の長時間労働で、週1日しか休みがなく、その割に給料は安かった(月額15万円程度)。そのうえ、ことばもルールもマナーもブラジルと大きく異なるため「ショック」だった。このように「最初からすごいいたいへんだった」が、同じ職場で働く同世代のブラジル人の仲間とたすけあいながらなんとか旅費を返済し、1年半後には、当時岐阜県にいた姉と相談して愛知県の団地で一緒に暮らすことになる。転居後は県内の自動車部品工場で働きはじめ、月収も25万円程度に増えた。ただし、そのうち8~10万円はブラジルの両親に送金していた。その後、3,4回の転職を経験するが、職場はいずれも自動車部品工場であった。

来日7年後(2007年)には日本で出会った日系3世の女性と結婚し、ともに働く。ところが2008年秋のリーマンショック以降、仕事は激減し、2008年末にはついに夫婦ともに解雇されてしまった。その後、半年は雇用保険の失業給付を受けて生活していたが、「お金がぎりぎり」の状態になったため、姉夫婦と相談して別の団地に移り、一緒に住むことにした。その後、2009年9月頃からようやく求人が出はじめ、姉夫婦、妻、ブルーノの順番で仕事が決まっていた。いずれも自動車部品工場であったが、給料は以前より低くなった。

こうして無事に再就職できたのだが、この間の心労とストレスによりパニック障害や鬱病などの精神疾患を患い、仕事ができなくなってしまった。そのため2009年末から治療に専念することにする。その甲斐もあって病状は快方へと向かい、翌年5月からは再び自動車部品工場での仕事を再開し、現在までそこで働いている。

治療に専念している期間には、ブルーノのその後の人生に大きな影響を与える出来事もあった。友人に誘われて、ブラジルでも行ったことのないキリスト教会にはじめて通いだしたのである。教会では、「勉強して成長すること」、「いつもレベルアップ」をめざすことの大切さを教わった。そのような話に耳を傾けることで、「なにか気持ちがかんたん戻ってきた」ことも、病気の回復に大きな影響をもたらした。

教会の友人は、学びの重要性を説いただけではなかった。ブラジル人の店で見つけたA校通信教育コースのパンフレットをブルーノに渡し、受講をすすめてくれたのである。そこでA校を訪れ、校長と話しているなかで校長が口にした「これからはじめの一步」ということばを聞き、「なにかうれしくなった」。そして現在、約10年ぶりの勉強に「なつかしい気」もしながら高卒資格取得をめざしている。

高卒資格取得後は、今後10年は帰国しないと妻とも話していることもあり、日本の大学に入って日本語や経済の勉強をしたいと考えている。レストラン経営や「ブラジルにある日本の会社の通訳」など、帰国後の職業に関する希望はいくつかあるが、いずれにせよ、日本で勉強にはげむことで「たくさんの道、オプションをつくる」ことが日本に滞在している間の大きな目標である。

### 3. 学業の継続

調査協力者14名のうち5名は、学業の継続を通信教育受講の理由としてあげている。ただし、そのうち2名(⑫, ⑬)は不本意なかたちで学業が中断されたことへのくやしさを受講の動機として語っており、残りの3名(⑤, ⑩, ⑪)は次の学業段階への橋渡しとしてより目的合理的なかたちで通信教育を選択している。

#### 学業中断のくやしさ

職をもとめて家族で他県へ移動することになり、高2まで通っていたブラジル人学校をやめざるをえなかったジルベルト(⑫)は、転居を機に仕事をはじめた。派遣会社の紹介によりプレス加工工場ではビス打ちと検査の作業をして、18万円ほどの月収を得た。早朝6時半の送迎バスで職場に向かい、8時から17時まで働いた。

だが、転居後もブラジル人学校で一緒に学んでいた友人の様子は気になった。働きはじめて1年が経過した頃、学校を離れてからも続けているFacebookでのやりとりを通じて、卒業した同級生の80%が帰国し、そのほとんどは大学に進学しており、残りの20%の大部分は日本の工場で働いていることを知る。同級生の多くが高卒資格を取得しており、そのほとんどが大学進学を果たしている

現実を前にして、ジルベルトは高校中退を強くやんだ。そして、不本意なかたちで中断された学業を再開すべく、学びの場を探しはじめるのである。

ジルベルト：友だちがみんな卒業してたので、ぼくだけ卒業してなかったのが、くやしかったね。  
ああ、なんでやめたんだろうと思って、勉強続けたいな、終わりたいなっていう気持ちで学校を探しに行ったんです。

A校通信教育コースを知ったのはインターネットのサイトを通じてであった。自宅から通える範囲であったことと「働きながら勉強したい」という希望に合致するものであったため、受講を決めた。「工場の仕事には慣れてなかったため、体がマジ疲れてた」ため、最初のうちは仕事が休みの土曜日と日曜日のみ勉強していたが、それでは修了までに時間がかかってしまうと考え、平日も仕事を終えてから1, 2時間の勉強を自らに課すようにした。その努力が実り、ちょうど1年で高卒資格を取得することができた。

その後も、2つ目の職場となる食品工場で働きながら、ブラジルの通信制大学を受講して1年半になる。専攻はポルトガル語と英語であり、修了すればそれぞれの言語について中等教育レベルの教員資格を取得することができる。大学で本当に学びたいのは環境工学であったが、日本にいて受講可能な通信制大学では「オプションが多くない」ため、かぎられた選択肢のなかからの受講となっている。ただし、語学習得により将来の職業選択の幅を広げようという思いは以前からあり、15歳の頃から語学学校に通って英語と日本語を学んでいた。そして現在は、「日本語の勉強をがんばって、英語もポルトガル語もがんばって、[工場労働ではない]ほかの、先生とか通訳の仕事がほしい」と考えている。

セルジオ(⑬)の場合は、通っていたブラジル人学校の高校部門が高3の2学期で閉鎖されてしまったため、行き場を失うかたちで労働の世界に入っている。基板組立工場で1ヶ月半働いたのを皮切りに、複数の工場を2週間から2か月程度の短期間で渡り歩いた。以前帰国した際にパソコン学校で3年間学んだ経験を活かして、老人介護施設で高齢者向けパソコン教室の講師を3か月ほど担当したこともある。

学校生活が不本意なかたちで中断されたことには「未練たらたら」だったが、職場をはじめとする友人との出会いに救われた。とりわけ、工場で知り合ったアメリカ人男性(母がアメリカ人で日本人男性と再婚)とはゲーム好きということで趣味が合い、頻繁に行き来をする間柄である。その男性からは、職業訓練の一環として募集のあった「国際ビジネス観光科」で一緒に学ぼうと誘われ、英語の勉強もできるというので受講したこともある。さらに、そこで出会った別の受講者と知り合いになったことがきっかけで、先述した老人介護施設でのパソコン講師の仕事が舞い込んできた。また、職場で出会った他の友人や街で知り合った友人たちとバイクでツーリングに出かけることは、現在「一番楽しいこと」である。友人たちとのこうした出会いに救われ、日本の公立高校に入れなかったことやブラジル人学校を卒業できなかった挫折感はかなり払拭された。

セルジオ：友人との出会いとそれからの経験が一番だったと思います。そういう楽しい思い出がなければ、今でも[公立高校に]入れなかったなとか、結構、後悔といえますか、未練がましいというか、そういう感情は結構残ってたとは思いますが。

このような経験を経て、セルジオには大学に行きたいという気持ちを新たにもつようになった。そして、そのためにはまず高卒資格を取得しなければと思い、A校通信教育コースの受講を決めたのである。

セルジオ：高校もとまったままだったから、また終えてみようかな。大学にも行きたくなくなったってというのがありますね。前は資金、大学の入学金やら授業料やらで悩んでたんですけど、まあ、奨学金とっちゃおうと。大学に入学するためには高校の卒業証明書がいるわけで、それをとりに来ています。

大学では英語を学び、卒業後は英会話教師や留学を経験した後、最終的には貿易業務に携わりたいと考えている。そうした目標に向けて、仕事をやめて勉強に専念する一方で、仕事でけがをして現在リハビリで入院中の父親のために費用がかかることもあり、通信教育の月謝や交通費の支払いも困難になってきつつある。そのため、「バイトも探そうかな」と思案中である。

### つぎの学業段階への橋渡し

もともと大学の学費を稼ぐことを目的に高校を中退して日本に来たマウリシオ(⑩)は、派遣会社が準備した愛知県内のアパートに家族5人で暮らしながら、自動車工場で検査の仕事をはじめた。4年間派遣社員として働いた後、上司と相談して契約社員に変更してもらった。また、派遣会社が準備したアパートは家族5人が生活するには手狭なうえに家賃が高かったことから、自分たちで不動産仲介業者をまわって別のアパート探し、引っ越した。

就労状況は比較的安定していたが、当初予定した4、5年という滞日期間を大幅に越える時間が経過するうちに、医者になりたいという来日前の希望はすでに過去のものとなってしまった。それでも大学に行きたいという気持ちは持ち続けていたが、いまだ十分な貯蓄ができないなかで、高卒資格をどのように取得すべきか思いあぐねていた。

そのような折、母親がA校通信教育コースの存在を知り、校長に話を聞きに行く。A校での教育が気に入った母親から話を聞いたマウリシオは、渡りに船とばかりに受講を決めた。妹も同時に勉強をはじめ、少し後から弟のユキオ(⑤)もはじめた。「仕事と勉強をするのはとてもむずかしい」が、3人きょうだいでたすけあいながら勉強時間を確保している。現在マウリシオは仕事をしていないが、それは、勉強に専念できるように、ほかのきょうだいがたすけてくれているからである。

マウリシオ：妹が勉強しているときは、仕事をやめて、ぼくが働く。勉強が終わったら、今度は妹が仕事を始めて、弟が勉強する。仕事をやめれば、勉強も早く終わらせることができます。それがいい。それで、今度はぼくの番になった。勉強を終わらせたいから、仕事をやめた。ぼくたちはお互いにたすけあっているんです。

貯金して家族それぞれの夢を実現すること。この、家族全員が共通に「信じる目標」に向かってたすけあえることを、マウリシオは最大の強みと感じている。その一方で、A校通信教育コースの存在そのもの（「A校がなければ、どうなっていたかまったくわかりません」）、そしてとりわけ校長の励ましはマウリシオの学業継続を大きくささえている事実も見逃せない。

マウリシオ：働きすぎて気持ちが落ち込んで、もう勉強なんかやめようと思うこともありました。でも、そんなとき彼（＝A校の校長）が電話をくれて、「あきらめちゃだめだよ！勉強を続けなきゃ」と言ってくれるんです。彼は本当にきびしい。でも、それがいいんです。できないからやめてしまいたいと思ってしまうとき、そう言ってもらうことは必要なんです。

日本で高卒資格を取得できることで、進学したい大学の選択肢も広がった。かねてより英語に興味があり、妹とともに英語学校に2年半ほど通ったこともあるマウリシオは、ブラジルより安全かつ割安の費用で通えるイギリスの大学を現段階での「最良の選択」と考えている。イギリスの大学でビジネスを学び英語をさらに上達させれば、帰国後の就職にも有利に働けらるうとの見通しもある。その夢を実現させるため、現在、高卒資格取得のための勉強に励むかわら、ブラジルから直接あるいは日本を経由して渡英し、すでに大学で学んでいる友人たちから、Facebook を通じて情報を収集しているところである。

自らが通うブラジル人学校が提供する教育への失望から当該校での高校進学をあきらめたユキオ（⑤）は、中学を卒業した後、工場で検査の仕事をして働いた。しかし、もともと高校進学の手配でいたため、兄のマウリシオと姉がA校通信教育コースをはじめたことをきっかけに、家族と相談して受講を決めた。実際に学びはじめると、以前通っていたブラジル人学校と比べて「教育の質がよい」ことを実感した。校長をはじめスタッフのサポート態勢がとてもよいことは何よりもよいと感じている。

兄と同じ英語学校に1年間通ったこともあり、高校卒業資格を取得した後は、英語で学べる大学で英語やアートを学びたいと考えている。そして将来的には、ブラジルに英語学校をつくるのが夢である。

幼稚園からブラジル人学校に通ってきたカルロス（⑩）は、2年後の帰国に備えてT校で自動車整備技術の勉強を終えたいと考え、その資金づくりのために高2が終わったところで学校をやめた。高校卒業まであと1年かけていると、帰国前にT校のコースを修了することができないからである。そして、学校をやめてからは自動車工場で働きはじめた（ただし、働くのはこれがはじめてではない。ブラジル人学校在学中から「家を手伝うために」ゴミ分別のアルバイトを週3～4回、放課後にしていた）。

T校のコースについては、在日ブラジル人向けの雑誌やインターネットを通じてのみならず、実際に受講経験のある友人からも情報を得ることができた。このコースを知り、好きな自動車に仕事でかかわれることに対するカルロスの期待は大きくふくらんだ。

調査者：T校に通おうと思ったのはなぜ？

カルロス：子どものときからずっと、車とかがすごく好きなんです。だから、16歳になったときはもう、バイクの免許をとろうとした。ずっと好きなので、やっぱり、それを仕事にするため。T校のコースをやって、それで好きなことを仕事にできたらいいなという気持ちで。

T校で学ぶのに高卒資格は必要とされないが、帰国前に高卒資格は取得しておきたかった。そこで、通っていたブラジル人学校に期間を短縮しての卒業は可能かたずねてみたが無理と言われた。別のブラジル人学校にも問い合わせしてみたが同様の回答だった。しかしその際、条件に合うかたちで高卒資格を取得できる方法としてA校通信教育コースを紹介してくれたのである。そこですぐに連絡をとり、受講を決めた。現在は、T校に通うための資金づくりと通信教育の月謝を支払うために工場で働きながら、短期間での高卒資格取得をめざして勉強にはげむ毎日である。

帰国後は、T校を運営する大手自動車メーカーがブラジルにつくった工場で働き、チャンスがあれば大学で自動車関係のことをより深く学びたいと考えている。A校通信教育コースを受講して高卒資格を取得できることは、その夢を実現するための重要な架け橋となっている。

カルロス：自分の夢を実現するために、この学校（＝A校通信教育コース）があつてすごくラッキーという気持ちです。すごくよかったです。

#### 4. 帰国後の基礎づくり

アンドレ (④) は14名なかで唯一、日本の高校（専修学校の高等課程）を卒業している。母親の病気治療のために高卒後1年通ったファッションの専修学校（専門課程）をやめて帰国したが、1年半滞した後、再び日本へやって来た。来日後はすぐに仕事をはじめた。まずは電機工場で働くが「給料があまりにも少ない」ため、1年半で自動車部品工場に職場を移した。その後、通訳の仕事をしたと考え、派遣会社にその職を得る。小2から専修学校まで日本の学校に通ったが、家庭では母親のきびしい指導のもとでポルトガル語使用が徹底され、自らも読書などを通じてポルトガル語に触れるようにしていたため、両言語ともに「キープできた」ことが役に立った。通訳は「基本的に人の管理」にかかわる仕事であるため「経験が浅いのでちょっときつい」が、現在まで2年間続けている。

だが、日本での求職経験や就労経験を通じて、「自分が外国人ということで、日本にはあまり〔自分の〕将来がない」と感じている。第一に、優秀な大学を卒業した外国人が日本で就職するのはむずかしいという話をよく耳にするからである。第二に、専修学校（高等課程）卒業後に、興味があったアパレル会社が募集していた販売アルバイトに応募したものの、面接を受けた5社全部で不採用になったという自らの経験がある。そして第三に、日本では「上下関係がきびしい」ため、「いくら自分が才能をもったとしても、やっぱり先輩が先にくる」と感じられるからである。以上の理由から、日本以外の、もっと「その人自身を見てくれる」国で働きたいと考えている。

日本への定住を希望しない以上、少なくともブラジルで生きていくための基礎としてポルトガル語での教育が必要と考え、A校通信教育コースの受講を決めた。もっとも初歩的なレベルから学習を開始し、高卒資格取得まで受講する予定である。初歩的なレベルからにしたのは、ブラジルの学校で1年生を過ごした期間を除き、正式にポルトガル語を学んだ経験がないため、正確なポルトガル語を習得したいという気持ちが強かったからである。そして、その効果は仕事のうえでの手応えとしてたしかに感じられている。

アンドレ：大学に入りたいていというのはあつたんですけど、まず、自分がちゃんとポルトガル語をしゃべりたいっていう意識がすごく高かつたんですね。言い方が悪いんですけど、ばかみたいな人になりたくなくて。それで、一から勉強しようと思ったんです。そ

れが一番強かったんですね。やりはじめると、自分で上達してるっていう感覚がわかるんですね。とくに通訳の仕事をしているから。だから、仕事ですごくたすかっている。

ただし、現在の通訳の仕事が続けていきたいわけではない。高卒資格を取得した後は、必要な資金を蓄えた後で日本を離れ、「ほかの国に行きたい」と考えている。具体的にはロンドンの美術大学でデザインを学びたいと考えており、奨学金の可能性を含めて1年半前から大学への問い合わせをおこなっている。英語については、母親の影響で中2の頃からカナダ人教師によるプライベート・レッスンを5年間受けており、その後も独学で学習を継続している。それゆえ、ロンドンにかぎらず英語圏は進学先として選択肢に入っている。大学で学んだうえで、将来はデザイン関係の仕事に就きたいという思いが強く、仕事さえあればロンドンや他の英語圏で暮らしてもよいと考えている。

## V. 学び直しによる経験の語り直し

これまで、離学にいたった背景について就労の選択、学校生活や学校環境、予期せぬ要因という3つの要因に分類して整理したうえで、離学後の就労生活から通信教育による学び直しにいたる過程について、工場労働への不満、学びへの触発、学びの継続、帰国後の基礎づくりという4つの側面から検討してきた。この検討を通じて浮かびあがってきたのが、学び直しにいたる過程は、しばしば自らが不本意なかたちで生きてきた人生を新たな視点にたって語り直す実践をともなっているということであった。

### 1. 日本で働くことについて

ナタリア(⑨)は家計補助のため、マウリシオ(⑩)は大学進学のための資金稼ぎのためというちがいはあるが、いずれもデカセギを目的に高校途中で日本へ渡った。共通していたのは、両者とも帰国後の生活を前提に、渡日を資金獲得のための手段と位置づけていたことである。しかし来日後、単純作業の繰り返しが多い工場労働に従事する経験は、それが当初の予定期間を越えて長引けば長引くほど、働くことの意味や学びの可能性について再考を迫ることにもなった。そうした再考の末に学び直しにいたった場合、日本での就労経験は、帰国後の生活のための資金稼ぎ以上の意味をもつものとして語り直される。

### 日本にいるから夢を描ける

マウリシオの場合、予定していた滞日期間を大幅に過ぎても帰国して大学進学するめどがたたず、来日前に抱いていた医者になる夢もすでに過去のものになっていた。しかし、A校通信教育コースとの出会いにより、日本にいながら高卒資格の取得が可能になった結果、大学進学を選択肢はイギリスの大学も含むかたちで広がり、来日前よりもよりよい条件での帰国を期待できるようになった。日本で英語学校に通えたことも、進学先の選択肢の拡大に役立っている。こうした状況の変化にともない、あくまでも資金獲得のために利用できる場にすぎなかった日本は、より望ましい将来を構想しうる拠点として異なった戦略的意義をもち始めるのである。

マウリシオ：日本には学校があって、そのために支払えるお金もあるので、勉強して、もっとよい将来を考えることができます。日本では仕事があって、それを支払えるほどの収

入がありますから。たしかに日本は文化がちがうのでむずかしいところがありますが、もし日本がなければ、現在のように夢を描くことはおそらくできないでしょう。ですから、ぼくがいま手に入れているものは全部、日本があってこそです。それはまちがいありません。

### 働けば自立できる日本

他方、ナタリアは、工場で単純作業を繰り返す生活を自省することにより、「先生になりたい」という夢を取りもどした。A校通信教育コースや通信制大学の存在により日本に在ながらの学びが可能になり、各地にブラジル人学校が存在することで、教職につくことさえ日本にいて可能かもしれないという期待をもてる状況になっている。そして、現実に関心を下支えしているのは、工場労働を通じて得られる収入である。ナタリアにとって家計補助のための来日は家族への依存と表裏の関係にあったが、自らの収入から月謝を支払って学ぶ経験は同時に、親から自立して自らの将来を展望する契機にもなっている。それにともない、工場労働に対する意味づけも、単なる否定の対象ではなく、自立に向けた自らの挑戦との折り合いのなかでなされるようになりつつある。

ナタリア：それが工場だったとしても、仕事をすれば勉強することができるし、自分がやりたいことを自分で考えることができます。親に頼らなくても、自分でやっていくことができます。

## 2. 同世代と異なる生活をしてきたことについて

不本意なかたちでの離学や早期就労を経験してきた青年たちにとって、離学前までかれらがともに学校生活を過ごしていた友人たちのその後の進路形成は大きな関心事の一つである。離学後の経験は、順調に卒業や進学を果たした友人とそれがかなわなかった自分とを比較してしまうがゆえの挫折感を、程度の差はあれともなう。しかしながら、今回の調査からは、学び直しへといたる過程は、自らが同世代の他者と異なる生活をしてきたことを肯定的に読み替える過程でもあることが浮かびあがってきた。

### 「つらい人生」を送ったからこそすべてを受け入れる

親の借金返済のために中学未修了のまま来日したアンジェリカ(②)は、借金完済後の目標喪失から半ば自暴自棄に陥っていたが、職場で知り合った彼氏に背中を押されてA校通信教育コースでの学び直しに向かった。家計の苦しさから子どもの頃からの夢だった獣医をあきらめざるをえず、来日後はどれだけ働いても給料は借金返済に消えて自分のもとにはなににも残らないなど断念ばかりの日々が続き、「夢なんかなかったみたいなの」になっていたアンジェリカにとって、学び直しへの取り組みは、否定的な色彩を帯びがちだったそれまでの経験を少し距離をおいて眺め、自らの人生に位置づけ直すよい契機となった。それは、これまで自らが生きてきた「つらい人生」を意味づけ直す試みといえる。

アンジェリカ：いろんなほかの人の人生と比べてみるとね、私は幸せな人生を送っているってわかる。だって、ほかに服もないところもあるし、食べ物もないっていう国もあるから。私の人生と比べると、私は本当に天国なんだよって。だから、ぐちぐち言



っちゃダメみたいな考えはある。(中略) きびしい人生を送る人はね、やっぱりそう思うんですね。自分の人生のことをぐちぐち言っちゃいけないってね。本当にきびしい人生を送ってない人は、「もう、やだ」とか「やんなるね」とか「これ、いらぬ」とか言う。そういう人じゃないと、そんなことは考えないと思う。つらい人生を生きていない人。私は〔つらい人生〕生きたなって思うから、そういう考えをしなくなつて。

こうした「つらい人生」を構成する出来事の一つに、小1から通った日本の小学校を卒業の目前でやめざるをえなかったことがある。仕事なくなった両親が帰国を決めたからで、当初はその理不尽さを責めることもあったが、両親には両親なりの「つらい人生」があったことを了解することにより、その経験も受け入れられるようになった。

アンジェリカ：「あと少しだったのに、なんで卒業までいなかったの？」ってお父さん、お母さんに言ったんですけどね。お金は使って仕事もなかった生活では、日本にいてもしょうがないからブラジルに帰ったんだって、〔今では〕わかるんですよ。

このように過去の「つらい人生」を肯定的に位置づけ直した現在、「今まで自分のためにやることがないから、これからは自分のために」生きていこうと前途を見据えている。A校通信教育コースでの学びは人生を自分のもとに取りもどすための第一歩であり、高卒資格取得後は、帰国後の仕事の選択肢を増やすために、好きな英語の学習のほか、メイクやエステやネイルの技術習得もしたいと考えている。

### 日本に来たからこそ「人生の勉強」ができた

ブルーノ(⑧)は家計補助のために高校を中退して日本へ渡り働くが、リーマンショック後の不安定な雇用状況のもとで精神疾患を患ってしまう。しかし、その治療期間中に友人の誘いで通いはじめた教会でさまざまな人びとと語り合うなかで、学ぶことの意義について再認識し、A校通信教育コースの受講にいたった。現在は、「いろいろあった」が、「乗り越えてよかった」と感じている。

高校中退の経験は、「いろいろあった」ことのなかでも大きなものの一つであった。ブルーノは来日した後も、高校時代の同級生が卒業後にどのような進路をとったかを気にしていた。そこである日、Facebookで調べたところ、同級生のほとんどがその後、大学を卒業していることを知る。それは、自らの境遇を後悔するのに十分な情報だった。

ブルーノ：〔高1の同級生の〕ほとんどが大学を終わっていました。私がずっと日本におったときに、友だちは学校を続けて、今はもう大学を卒業しました。私も、日本へ来なかつたら、たぶん同じレベル。

だが、さまざまな出会いにより、学ぶことの意義を自らの人生に位置づけ直すことで、そのようななかたちで「悩むことは乗り越えた」。現在感じているのは、むしろ、「はじめの一步」を踏み出したことへの喜びである。それは同時に、日本で過ごしてきた時間の再評価をともしなうものでもある。とりわけ、身近で苦勞をともししてきた妻から、「あなたは日本にいろいろな勉強した。日本とい

うほかの国を経験して、その国のことばも勉強した。それも自分の人生の勉強」と自らの経験を肯定してもらえたことは、ブルーノにとってなによりも大きなささえである。

### 「コースからはずれてしまった」がゆえの愉快的な経験

希望していた日本の公立高校への入学が思うようにならず、通っていたブラジル人学校の高校部門の閉鎖により学校生活が中断されたセルジオ (13) は、高校を卒業できなかったことに深い挫折感を抱いていた。しかし、その後、職場や街で知り合った友人たちと充実した関係を築いていくなかで、そうした挫折感は少しずつ払拭されていった。「高校に入っていたら絶対にこういう愉快的なことにはなっていない」というふうに、学校を離脱したからこそ「もまれて流されて」豊かな経験ができたと言語直すことで、セルジオは自らの軌跡を肯定的にとらえることができるようになったのである。

セルジオ：たとえば、同じバイクに乗ってるブラジル人と知り合いになったり、ケバブ店のおっちゃんの店長と知り合いになったり、それなりに楽しい出来事はたくさんありましたね。いわゆる出世コース的な普通の、たとえば中学入って高校卒業して大学入るといったコースからはずれてしまったけれども、それなりに楽しかったと。それとはまた別の経験というんですか、そういうのもできた。

### 異なる環境で育ったからこそ身についた人生感覚

アンドレ (14) は小2から高校卒業までを日本の学校で過ごしてきたながら、外国人であるがゆえに日本には職業人としての自らの将来を見出せないと感じ、英語圏でのキャリア形成を考えている。ただし、外国人として不利な条件下で日本社会を生きてきた経験は、トランスナショナルな私たちでのキャリア形成の第一歩を踏みだしつつある現段階においては、今後を生き抜いていくための新たな拠り所の一つとして資源化されつつある。すなわち、異なる環境で育ってきたがゆえに、同世代とは異なる多面的な考え方や「人生感覚」を獲得し得たという意味で、違和感を感じ続けてきた滞日経験は、視野の拡大を可能にする契機として語り直されるのである。

調査者：日本での生活をどういうふうに感じていますか？

アンドレ：現在は、自分の視野を広げるためだったとは思いますがね。いろいろつらい経験をして、自分がなじめてないっていうか、自分がみんなと一緒にじゃないっていう環境に育てられたことで、やっぱり世間の見方だとか、人生の見方がちがうと思うんですね。日本人の友だちの話を聞くと、やっぱり「自分とは」ちがうっていうのがわかるんですね。日本で成長したっていうことは、そういう面ではよかったかなと思いますね。世界を知ってるまではいかないんですけど、いろいろな方向があると思うようになったんですね。1つだけにとらわれずに。

調査者：なるほど。おもしろいですね。

アンドレ：人生感覚がちがうと思うんですね。それは、ただ、そういう環境で成長したからってそうなるってわけじゃないとは思いますが。

異なる環境のうちには、同世代に比べて大人のいる環境で過ごす時間が多かったことも含まれて

おり（この場合の大人とは、親戚や親の友人などのブラジル人である）、そうした環境が、大人になるということの明確なモデルをアンドレのうちに育んでもきた。

アンドレ：やっぱり、年上の人と一緒に環境で育てられたせいかもしれないけど、年上の人と結構話が合うんですね。

調査者：割とそういう環境があったんですか？

アンドレ：そうですね。おじさんとか、親の友だちとか。日本でも大人のいる環境のなかで育てられたから。

調査者：具体的にはどういう環境？自分のうちによく大人がやって来たりとか？

アンドレ：親の友だちとかが遊びに来たり。

調査者：そういうときに、大人はこういう話をしてたなというのはなにかありますか？

アンドレ：自分の意見をはっきり言うっていうのが、すごい格好いいなと思って。日本人ってあんまり自分の意見を言わないじゃないですか。自分もどっちかっていうと日本人系なんです。自分もちょっと言いづらい部分があつて。だから、たぶんそういう大人になりたいかなっていう。

## VI. まとめと考察

本稿では、早期に学校を離脱して労働の世界に参入した在日ブラジル人青年が学び直しに向かうプロセスを、中卒・高卒資格の取得が可能な通信教育を受講する14名の青年の生活史にもとづいて描いてきた。具体的には、離学にいたる経緯と学び直しにいたる経緯という二段階にわけたうえで、後者については、離学後の生活状況、学び直しへの動機づけ、学び直しの現状、将来展望の4点を含むかたちでの整理をおこなった。この作業は、在日ブラジル人青年のキャリア形成において多様な要素が混在する事実を確認するものであると同時に、キャリア形成における語り直しの意義について考察を迫るものでもあった。以下、本研究で得られた知見をまとめたうえで、在日ブラジル人のキャリア形成を理解するうえで必要な視点について論じる。

まず、離学を生じさせる理由として、〈就労の選択〉、〈学校生活や学校環境〉、〈予期せぬ出来事〉という3つの要因が浮かびあがってきた。〈就労の選択〉の目的は、家計補助と自らの願望の実現に大別できた。家計補助が必要となる背景に目を向けると、家業の経営不振など通常デカセギの動機として語られるもののほか、親の借金返済や母親がシングルマザーであるがゆえの生活難など、より切迫した状況が浮かびあがってきた。

〈学校生活や学校環境〉との関連で離学が生じる際の主要な要因は、日本の学校との関連では学業不振といじめであった。学業不振は日本語能力の不足によるところも大きいですが、それだけではなく、編入学年に関する配慮不足や学習支援態勢の乏しさなど、環境的要因も少なからず影響していた。いじめは、それ自体が離学の誘因である一方で、上記のように学業不振をもたらす環境的要因の一つともいえる。他方、ブラジル人学校との関連では学校閉鎖が離学を引き起こしていた。学校閉鎖が、日本社会におけるブラジル人学校の法制度的位置づけが不安定であり、経済的援助をはじめ公的支援がほとんど得られない状況下で生じていることからすれば、のぞまぬ離学が構造的につくりだされているといえるだろう。

構造的につくりだされる離学ということでは、〈予期せぬ出来事〉についても同様のことを指摘できる。事例のひとつに、両親の求職行動にともなう転居をきっかけとして離学を余儀なくされた

というものがあつたが、この背後に、在日ブラジル人を「雇用調整のためのフレキシブルな緩衝要員」(大久保 2005, p.148)に位置づけ続ける日本の労働市場が存在することはいうまでもない。

では、さまざまな理由から一度は学校を離脱した在日ブラジル人青年たちが、ふたたび学びの場に戻ってきたのはなぜなのだろうか。かれらが学び直しにいたる契機について14名の調査協力者の生活史を分析した結果、〈工場労働への不満〉、〈学びへの触発〉、〈学業の継続〉、〈帰国後の基礎づくり〉という4つの契機を抽出することができた。

〈工場労働への不満〉として共通して語られたのは、工場で単純作業を強いられることからくる閉塞感や精神的苦痛であった。工場労働の世界への参入が積極的なものであったにせよ、消極的なものであったにせよ、同じことを繰り返すという工場労働の特徴自体が自己の存在意義を問い直す契機となっていた。工場労働への従事が、逆説的なかたちではあるが自らのキャリア形成に主体的にかかわる構えを形成したともいえる。その結果として、学び直しへの取り組みも自律的になされていた。

〈学びへの触発〉は、学びの意義・効用・希望について語り、背中を押してくれる他者との出会いが学び直しの契機となったケースである。家計補助、いじめ、学業不振などを理由に自らの進学可能性を断念するかたちで労働世界に参入した青年たちは、相対的に自己肯定感が低く、工場労働に対しても不満をもつより、そういうものとして受け入れる傾向にあつた。しかし、ある時点で学びの重要性を語る恋人や友人といった「親密な他者」(中西 2009)と出会い、かれらと語らうことを通じて、一度は喪失した自らの目標を共同で構築していくことが可能になっていた。また、学び直しの場合(A校)そのものが目標を共同で構築し、ささえていく現場であったことも見逃せない。学びと自己との関係も、そうしたプロセスを通じて新たに編み直されていた。

〈学業の継続〉には、不本意な離学へのくやしきから学業への復帰を切望していたケースとつぎの学業段階へのより有効な橋渡しとなる学びの場を模索していたケースが含まれる。いずれにしても、学業継続への意志を就労生活のなかでも維持しており、A校通信教育コースとの出会いはその希望をかなえるものだったといえる。

〈帰国後の基礎づくり〉は、学校生活のほとんどを日本の学校で過ごし、高卒資格まで取得しながらも、日本に自らの将来を見出せないと感じるがゆえに、帰国に備えてポルトガル語での学びを選択したケースであった。

以上のように、早期に学校を離脱した在日ブラジル人青年が学び直しに向かう契機は、離学の経緯や離学後の生活状況のさまざまなありようを反映して多様である。ただし、いくつかの事例から共通して浮かびあがるのは、かれらの学び直しのプロセスを理解することは、かれらが自らの過去や現在をどのように語り直し、自らの将来にいかん位置づけようとしているかを理解することと相即不離の関係にあるということである。今回の調査で浮かびあがった語り直しをその内容に即して分類すると、以下の2つに大別できた。

まずは〈日本で働くことについて〉の語り直しである。帰国後の生活を前提に渡日を資金獲得のための手段と位置づけていた者であっても、来日後、工場で単純労働を繰り返す日々疑問を感じ、働くことの意味や学びの可能性について再考した末、学び直しにいたることがある。日本で学び直しに着手することは、日本がかれらにとって帰国後のキャリア形成のための資金稼ぎの場から、キャリア形成の現場になることを意味する。日本で働くことは、〈いつか〉ではなく〈いま-ここ〉での資源獲得とそれによるキャリア形成上のチャンスの拡大に寄与するものとして評価し直されるのである。

つぎに〈同世代と異なる経験をしたことについて〉の語り直しをあげることができる。不本意なかたちでの離学や早期就労を経験してきた青年たちは、かれらにとって「標準」的と映る同世代の他者の進路と自らの軌跡を比較して、後者を低く評価しがちであった。しかしながら、学び直しへの取り組みは、自らの軌跡について少し距離をおいて眺め、意味づけ直すよい契機となっていた。かつては資源の獲得を妨げてきた要因として語られた「つらい」過去は、現在、かれらが獲得しえたと自負する視野の広さ、寛大さ、豊かな人間関係などの形成要因として新たに意味づけられ、今後を生きていくための拠り所として資源化されている。それは、「なにが学びか」をめぐる語り直しを通じて、評価の軸そのものをずらしていく実践ともいえるだろう。

では、以上の知見から、在日ブラジル人青年のキャリア形成をめぐる研究を進めていくうえで、どのような示唆を得ることができるだろうか。まず確認したいのは、かれらの雇用形態は派遣社員・契約社員・アルバイトなどの非正規雇用が主であり、その点において、近年、青年期における「移行の危機」に関する議論のなかで注目を浴びつつある「ノンエリート青年」の移行過程と類似点を有するという点である（中西・高山編 2009）。高山（2009）は「ノンエリート青年」を「新規一括採用による正規雇用での就職、そして男性の場合は長期雇用による初職の継続と年功序列による昇進を前提とした世帯形成、一方女性の場合は結婚退職をある程度まで前提とした就職と（上述のような男性との）世帯形成後の専業主婦化ないしは必要に応じたパート勤め、そして年金および子どもからの援助による退職後の生活、という『典型的』で『平均的』とされる『日本型雇用』を基礎としたライフコースを展望できない人々」（同上、p.353）と定義したうえで、かれらの移行過程は、「その多くが短大卒、専修学校（各種専門学校含む）卒、高卒、および高校中退者を含めた中卒という学歴から始まることになる」（同上、p.354）としている。そして離学後、不安定雇用労働者として離職・転職を繰り返す生活をいわば「常態」とする傾向にあることも含め、両者の間にはたしかに共通性を見出すことができるだろう。その意味では、轡田（2011）がノンエリートの「地元志向の若者」が地域の労働市場に増大する外国人労働者に対して排外主義的な感情を抱く現実を危惧しつつ、対立するのではなく「共有される体験についての想像力を高め、両者を架橋する感受性を養う契機を、なんとかして見つけていかねばならない」（同上、pp.209-210）と論じるのはもつともなことである。

ただし、「両者を架橋する感受性」の養成は、「共有される体験」のみならず「容易には共有されない体験」についての想像力も同時に必要とするのではないだろうか。たとえば、本稿の調査協力者の最終学歴は、「中卒」である者が14名中10名、それさえ達成できていない者が3名ときわだって低かった。この現実自体がすでに日本社会において両者がおかれた状況のちがいを示すものであるが、こうした低学歴にいたるプロセスが在日ブラジル人に特有の事情を含んでいることも、本稿で「離学の理由」として論じたとおりである。また、一口に非正規雇用といっても、在日ブラジル人青年の場合、その就労業種は自動車・電機産業あるいは弁当工場などの製造業にほとんど限定されており、「特定部門への集中」（樋口 2010、p.63）が顕著である。ここでも、かれらに特有の困難が生じている。たとえば、ブルーノ（⑧）は弁当工場と自動車部品工場で働いた経験を有するが、工場で単純作業を長時間おこなうことに嫌気がさし、多少給料が下がっても「工場以外、たとえばソフトバンクとか、イオン、スターバックス、マクドナルドのサービス業がやりたい」と考えている。「人と話ができて、日本語もうまくなる」職場と期待するからだが、流暢とはいえない日本語能力が転職の障壁となっている。だが、仮に日本語能力に支障がない場合でも、希望する業種に職を見つけるのは容易ではない。アンドレ（⑭）はデザインの専修学校（高等課程）卒業後にアパ

レル会社が募集していた販売アルバイトに応募したが、面接を受けた5社すべてで不採用になった。面接では毎回、帰国予定の有無について聞かれ、そのたびに帰国の予定はないと答えるのだが、結果にはつながらなかった。そうした経験を通じて「自分が外国人ということ、日本にはあまり〔自分の〕将来がない」と感じるようになり、ついには他国にキャリア形成の可能性を模索するにいたっている。在日ブラジル人青年が「外国人」として日本で生きるがゆえに経験するこうした困難の一つひとつを丁寧に把握していく作業が、共通性の把握と同時にともめられるだろう。

その一方で、自らのライフコースを展望するにあたって、かれらが「ノンエリート青年」たちと現段階で大きく異なる位置に立っていることを認識することも重要である。端的にいえば、かれらには、日本の学校のみに通うことや日本でのキャリア形成のみが「大人になる」ための道筋と考えられているわけではないということである。調査協力者のうち日本の学校に通った経験をもつ者は7名いたが、日本の学校にしか通ったことのない者は皆無であり、全員がブラジルの学校かブラジル人学校のいずれか、もしくは両方に通った経験をもっていた。残りの7名については日本の学校への在学経験はなかった。また、学び直しにより高卒資格を取得した後の進路希望にしても、日本の専修学校や大学、日本にいて受講可能なブラジルの通信制大学、ブラジルの大学、イギリスの大学など多様であった。さらに、その後の居住に関しても、日本とブラジル以外の第三国を選択肢に入れる者もいた。すなわち、就学もキャリア形成も、トランスナショナルなかたちで模索しうるものとして、かれらにはとらえられているのである。そのことがかれらの将来にどのような帰結をもたらすかについて、現段階で安易に評価することは慎まなければならぬ。

ただ、今後の研究に向けてつぎの点のみ確認しておきたい。以上見てきたように、本稿で対象とした在日ブラジル人青年たちは、新卒一括採用による正規雇用という「標準」からも、移行過程が日本国内ないし日本の学校経由のみで完結するとの想定からなる「標準」からもはずれるライフコースを歩んでいる。だが、グローバリゼーションにともなう社会の構造的変化の影響を受けてこうした「標準」自体の自明性がゆらぎつつある現状を鑑みれば、キャリア形成をめぐるかれらの模索を「例外視」することはもはやできないだろう。むしろ、現代日本社会において、かれらがかぎられた資源を駆使していかに独自のライフコースを築いていくかを理解することは、「標準」がますます定かでなくなる社会における自立のありようについて多くの示唆を得ることにつながるのではないだろうか。少なくとも、本稿における調査協力者たちは、見通しが悪く不安定な状況下でありながらも、それぞれが独自の仕方資源を活用し、また、語り直しにより経験の新たな資源化をおこないながら、自立に向けての回路を見出そうと必死に試みていた。こうした試みは、「ノンエリート青年」たちの生き方と重なりを見せたり、なにかしらのずれを見せたりしながら続けられていくだろう。それをかれらの視点にたつて理解することは、直線的・一方向的であることを前提としない移行過程を組み込んだ社会の形成をより多様なかたちで模索するうえで欠かせない作業になるはずである。

#### <注>

- (1) ブラジルの基礎教育 (Educação Básica) は3段階で構成されている。①就学前である幼児教育 (Educação Infantil) , ②前期課程 (Primeiro Ciclo, 1年生～5年生) と後期課程 (Segundo Ciclo, 6年生～9年生) に分けられる基本教育 (Ensino Fundamental) , そして③中等教育 (Ensino Médio, 3年間) である。

(2) T校は、1999年に大手自動車メーカーが在日ブラジル人の若者を対象に開設した1年制の自動車整備技術修得コースであり、すでに280人を超える学生が卒業している。このコースではポルトガル語による指導がなされ、ブラジルの自動車事情に即した教育プログラムが実践されており、修了すると日本の3級自動車整備士資格と同等以上の技術を修得できるとされている。コース終了後は帰国してブラジルの自動車関連産業に就職し活躍することが期待されており、就職先（自動車販売店など）の斡旋もおこなわれている。2014年度の学生募集要項をみると、応募資格は「1. 在日ブラジル人であり、日本或いは、ブラジルの中学校卒業資格を有する者、2. 1988年9月1日～1998年8月31日に出生した者、3. 在学中の居所については自宅通学又は学生寮・アパートとなります、4. 本コース終了後、ブラジルで就労する意志のある者」とされている。また、授業料が年額480,000円（前期240,000円、後期240,000円）、年間必要経費が86,000円（含む消費税）、その他に昼食代（学生食堂利用の場合）が1食あたり515円（20日×515=10,300円消費税別）となっている。

(3) 小町（2013）によれば、2012年現在、在日ブラジル人向けの通信制大学機関は7校存在し、700名強の受講生が学んでいる。

#### <参考文献>

- 押野寿美子 2010、『ブラジル人学校の子どもたち―「日本かブラジルか」を超えて』ナカニシヤ出版。  
 浜松 NPO ネットワークセンター 2005, 「外国人教育支援全国交流会 2005 提言」  
 (<http://www.n-pocket.jp/inclusion/foreigners/education-projects/teigen2005.html>, 2012.8.28)  
 樋口直人 2010, 「経済危機と在日ブラジル人―なになが大量失業・帰国をもたらしたのか」『大原社会問題研究所雑誌』622, pp.50-66.  
 広崎純子 2007, 「進路多様校における中国系ニューカマー生徒の進路意識と進路選択―支援活動の取り組みを通じての変容過程」『教育社会学研究』第80集, pp.227-245.  
 金井香里 2012, 『ニューカマーのいる教室―教師の認知と思考』勁草書房。  
 児島明 2006, 『ニューカマーの子どもと学校文化―日系ブラジル人生徒の教育エスノグラフィ―』勁草書房。  
 児島明 2008, 「在日ブラジル人の若者の進路選択過程―学校からの離脱／就労への水路づけ」『和光大学現代人間学部紀要』1, pp.55-72.  
 小町友樹エベルチ 2013, 「在日ブラジル人の通信制大学について」『愛知淑徳大学現代社会研究科研究報告』9, pp.59-78.  
 響田竜蔵 2011, 「過剰包摂される地元志向の若者たち―地方大学出身者の比較事例分析」樋口明彦・上村泰裕・平塚真樹編『若者問題と教育・雇用・社会保障―東アジアと周縁から考える』法政大学出版会, pp.183-212.  
 宮島喬・太田晴雄編 2005, 『外国人の子どもと日本の教育―不就学問題と多文化共生の課題』東京大学出版会。  
 中西新太郎 2009, 「漂流者から航海者へ―ノンエリート青年の〈労働―生活〉経験を読み直す」中西・高山編『ノンエリート青年の社会空間―働くこと, 生きること, 「大人になる」ということ』大月書店, pp.1-45.  
 中西新太郎・高山智樹編 2009, 『ノンエリート青年の社会空間―働くこと, 生きること, 「大人になる」ということ』大月書店。

- 大久保武 2005,『日系人の労働市場とエスニシティー地方工業都市に就労する日系ブラジル人』御茶の水書房.
- 小内透編 2003,『在日ブラジル人の教育と保育—群馬県太田・大泉地区を事例として』明石書店.
- 太田晴雄 2000,『ニューカマーの子どもと日本の学校』国際書院.
- 佐久間孝正 2006,『外国人の子どもの不就学—異文化に開かれた教育とは』勁草書房.
- 志水宏吉編 2008,『高校を生きるニューカマー—大阪府立高校に見る教育支援』明石書店.
- 志水宏吉・中島智子・鍛冶致編 2014,『日本の外国人学校—トランスナショナリズムをめぐる教育政策の課題』明石書店.
- 志水宏吉・清水睦美編 2001,『ニューカマーと教育—学校文化とエスニシティの葛藤をめぐって』明石書店.
- 清水睦美 2006,『ニューカマーの子どもたち—学校と家族の間の日常世界』勁草書房.
- 清水睦美・児島明編 2006,『外国人生徒のためのカリキュラム—学校文化の変革の可能性を探る』嵯峨野書院.
- 高山智樹 2009,『『ノンエリート青年』という視角とその射程』中西・高山編『ノンエリート青年の社会空間—働くこと, 生きること, 「大人になる」ということ』大月書店, pp.345-401.
- 趙衛国 2010,『中国系ニューカマー高校生の異文化適応—文化的アイデンティティ形成との関連から』御茶の水書房.
- 山崎香織 2005,「新来外国人生徒と進路指導—『加熱』と『冷却』の機能に注目して」『異文化間教育』第21号, pp.5-18.

(本研究は,平成26~28年度科学研究費補助金(基盤研究C)「ニューカマー青少年の学び直しを支える教育環境設計に関する研究」(研究代表者:児島明,課題番号26381131)に基づく研究成果の一部である。)

(2014年10月3日受付,2014年10月30日受理)